

時 局 と 宗 教

永 瀧 堯 憲

高原はもう秋の空氣に包まれてゐる。然し戦争のために山からも一人減り二人減りの寂しさを忍ばれる。津々浦々どんな山間僻地にも「萬歳」の聲はとゞろいてゐる。げに悲壯な萬歳である。が我等僧侶は此の時に於てこそ偉大な宗教家となり、もつと時代の趨勢を的確に觀察して正確な認識を得なければならぬ。現代日本の國は人物の養成と共に一般人の知識欠陥を擴充しなければならぬ。即ち啓蒙期が必要なのである。智育偏重と云つてゐるが、必ずしも知識教育をば排斥するには足らない。なるほど軍事的な科學や、工業的な科學、觀念的哲學等を考察して見れば或ひは我國はその點に於て世界各國に比して落ちないかも知れない。——が何故戦争が起るか？——何故既成宗教は無氣力に保守的に或は退嬰的になつて行くのか？——何故民衆が生活難にあへがねばならぬか？ 等について正しき認識を持つてゐるものが今我國に果して幾人あるであらうか。げに寂寥たる觀があるではないか。宗祖大聖人の門徒にしても、眞實に大聖人の氣概、信念を體得して經文、祖書を弘通し得るものが幾人あるであらうか。

現在の宗教界を觀察すれば丁度日本は天保時代あたりに擬すべきものであらう。當時外國の空氣（それは鎖國日本を根抵か

ら啓發させようとする）が、とう／＼として流れて來る中に時の支配階級である幕府の支配能力の没落、これを糊塗しようとする極端なる彈壓、大飢饉に依る民衆の極度なる生活難、大鹽平八郎先生の壯舉、頑迷なる國粹主義的鎖國派、幕府におもねつて尙立身出世をしようとする集團、學界では朱子學派の蘭學に對する、陽明學派に對する、陰に陽に壓迫を加へんとする工策、その時にあたつて、佛教側の態度はどうであつたか？ キリシタン宗に對する極端な誹謗、幕府への密告等に意をうばわれて、民衆の精神的、物質的、苦惱を解決せんとする宗教本來の使命をよそに見て、莫大な土地と大伽藍を擁して内々利殖の道に汲々としてゐた佛教——

丁度かうした胎内の中に明治維新は刻一刻と誕生への機會を孕みかけてゐたのである。かうした状態はそつくり、そのまゝ現在の社會に適用され得るのではなからうか。

明治初年より中期に至る間は我國に對してキリスト教は最も進歩的役割をもち、社會の發展を促進した如く、今後の日蓮宗も宗祖大聖人の該博と意氣と見識とを繼承して社會の進展に盡さなければならぬ。現今に於ける宗教の社會に有する役割は精神文化の根源となつて社會をより以上に理想化する重要な使命を持つものである。社會を隔つた宗教は次第に没落への運命を辿らざるを得ないであらう。宗教が現在の沈滞状態より立上るには社會の中に根強く食込んで日常生活の基調たらしめなければならぬ。敢へて教團の奮起を念じて息まないものである。